

## 祖母への小さな親切

埼玉県 常盤中学校 2年 清水 悠翔

家族と母方の祖母とで夏休みを使って福島県の五色沼を訪れた。

祖母のことは、小さいころから「ババ」と呼んでいる。祖母は64才になるがとても元気だ。

五色沼の初心者向けのトレッキングをしたときのこと。元気とはいえ、手すりもない下り坂を歩くのは少ししんどそうだった。

母から、

「悠翔。ババの手を引いてあげなさい。」

と言われたが、とっさに、僕は聞こえないふりをしてしまった。命令口調がいやだったからだ。それより、なんとなく照れくさい気持ちと、自由に歩きたいのに、面倒くさいという気持ちもあったと思う。

気づくと、僕の代わりに小学3年生の弟が、祖母の手を握っていた。弟はニコニコして楽しそうだった。いっしょに歩いている祖母も、とてもうれしそうだった。いつもわがままばかりの弟の方がよほど大人に見えてはずかしかった。

小学校のころは、素直に行動できていたのが、近ごろは親から言われると、なんでも反発してしまう。そして失敗ばかりする。今回も、なんとなく感じるうしろめたさで、みんなから少し離れて歩いた。歩いていて楽しくなかった。

次の沼から進むところも、長い下り坂だった。今度は僕が祖母の手を引いて歩いた。祖母と手をつないで歩くのは、恐らく、幼稚園のころ以来だ。祖母の歩きはこんなに遅かったのか、ガイドさんとの距離がどんどん開いてしまった。

祖母は、

「悠ちゃん。先に行っていていいよ。ババはゆっくり行くから。」

と言ったが、僕は、「大丈夫だよ」とだけ答えた。祖母が転ばないように、石の出っ張りが無いところを歩けるように注意した。幼稚園児だったころ、祖母や両親に手を引かれて下った筑波山のことを思い出しながら、僕はゆっくりと歩いた。

トレッキングを終えると、とてもすがすがしかった。それ以上に、祖母に親切にできたことが、素直にうれしかった。

次に向かった桧原湖では、モーターボートに乗った。乗り場の木の橋が揺れていたのに、誰からも言われなかったが、祖母の手を引いた。祖母は「ありがとうね、悠ちゃん。」と言ってくれた。ボートから降りるときは、弟と二人で手を引いた。

陸に上がると母から、「よく気がついたね」と褒められた。いつもの癖で、「べつに」とぶっきらぼうに答えてしまったが、今日の母は笑っていた。それを見て、自分でも笑ってしまった。

僕に足りないことは、素直さだと思う。そして、これから大人になっていく僕たちが、社会の恩返しの気持ちで、親切にならなければいけない立場ということもわかった。

これからは、ほんの小さなことでもよいから、親切なことをしようと思う。